

論文要旨

本論文の試みは、『地の果て 至上の時』（1983年）における竹原秋幸の“父殺し”が、浜村龍造の自死によって失敗したとする定説を覆すものである。“父殺し”失敗説は柄谷行人(1993年)や渡部直己(1996年)らによって論じられているが、それに対し疑義を呈した先行研究はない。また竹原秋幸や“父殺し”について考えるとき、『岬』（1975年）『枯木灘』（1976・7年）『地の果て 至上の時』から成る〈秋幸三部作〉の括りで見るのが一般的だ。だが、そこに秋幸の母・フサを主人公として母系一族の序章を描いた『鳳仙花』（1979年）を加えるべきだと考える。なぜなら、〈秋幸三部作〉と『鳳仙花』の深層には天皇制批判のテーマが込められており、それは『鳳仙花』によって明瞭となるからだ。『鳳仙花』はこれまでフサの半生を描いた作品という認識で読まれてきたが、この作品はこのような認識で留まるものではない。この作品の作中時間が近代天皇制下であることを鑑みると、本作には“父”の存在が欠落し、かつ史実においても天皇の存在が無化されていることから、そこに中上が天皇制批判の意味を内包させたと考えられる。この批判を潜在させる手法は秋幸の“父殺し”にも通じる。つまり、これまでは〈秋幸三部作〉という括りで物語群を読み、また『鳳仙花』をフサの半生を描いた物語と認識し続けたことによって、狭い読みしか成されていなかったということだ。そこで本論文では、〈秋幸三部作〉の括りを取り壊し、『鳳仙花』を加えた四作品から成る物語群を〈秋幸サーガ〉と呼び、秋幸が成長し、“父殺し”を成し遂げるまでを明らかにする。そしてその上で『鳳仙花』に新たな解釈を加えることによって“父殺し”の成功を裏付けることを目的とする。

以下に各章の内容を記す。

第1章 〈秋幸サーガ〉の生成過程

中上健次が竹原秋幸を創造するまでを詩やエッセイを含めた初期作品から確認した。初期作品では早い段階から自死した兄と実父の存在を中上が描いたように、これら2つは中上の中では描かなくてはならないテーマであったことがわかる。初期作品のうち、中上の家族を模した人物が描かれていたり、後に発表する〈秋幸サーガ〉と登場人物が似通っていたりする作品では、自死した兄を繰り返し描いたように、兄の自死が強い葛藤となっており、初期における創作は、その葛藤を言語化することが目的であったと言える。そしてその目的を果たしたとき、中上は自分自身と実父を模した登場人物を描けるようになり、自身の存在について問うた。そしてこれらの人物像とテーマが、竹原秋幸と浜村龍造を描く〈秋幸サーガ〉へと踏襲されたことを明らかにした。

第2章 『岬』論—秋幸が自己を確立するまで—

彼（秋幸）が確固たる自己を獲得する過程を明らかにした。姉や母の言動に影響を受けて動く彼は、姉に自死した兄の影を重ねられることによって、秋幸として〈存る〉ことができない。彼が確固たる自己を獲得していない様は、彼のにおいに示唆される。

死者に固執する母系一族に息苦しさを憶えた彼は、近親相姦を行った。彼のにおいに着目すると、彼は性交の後、におい（=自己）を獲得した。このとき彼は自身のにおいに対して、異母妹が言う「石鹸のようなにおい」ではなく、「わきがのにおい」がすると思っっていることから、他者のことばに影響されずに自身のことばに確信を持てた。したがって、彼は近親相姦を行ったことによってアイデンティティを保証できるまで成長したと考えた。

第3章 一1節『枯木灘』論—秋幸の死と再生—

秋幸が“父殺し”を実行できる人物へと成長していく過程を確認した。秋幸は『岬』において自己を獲得したが、『枯木灘』では兄・郁男の行動を無意識裡に反復してしまう。この反復行為は郁男の存在が葛藤となっており、自己の固有性を否定している証である。その上、秋幸は母系・実父・義父のそれぞれの家に属し切れず宙づり状態である。家の親和を突き付けられた秋幸は、突発的に異母弟を殺害してしまう。この異母弟殺害は、秋幸を殺せなかった兄を越える行為でもある。兄を越えた秋幸は逃走した山中で血を流す。これは家に固執し、「路地の秋幸」と自認した秋幸が死に“父殺し”を果たせる邪悪な存在へと生まれ変わったことを意味すると考えた。

第3章 一2節『枯木灘』論—土方作業から見る秋幸の暴力性の開花—

土方作業は秋幸の感情の動きを見る指標と言える。土方作業に従事する秋幸の変化を追い、暴力性が開花していく過程を確認した。血縁や家のしがらみの中に位置することによって不安を抱き続けている秋幸は、土方作業中に風景に「染まる」感覚を抱くことで何も考えることのない、主体なき存在となり、その不安を浄化していた。だが、浜村家と保っていた均衡が破れたことによって常に龍造を意識してしまい、土方作業に従事しても秋幸は風景に染まりきれず、内面の浄化は叶わない。この変化はこれまで自身が気付かなかった暴力性を開花させ、異母弟殺害そして、龍造との対決へと秋幸を導いたと考えた。

第3章 一3節『枯木灘』論—〈秋幸サーガ〉と神話—

『岬』『枯木灘』を通して秋幸は悪の力を身に付け邪悪な存在、つまり“父殺し”が可能な存在へと成長していく。それはスサノオの成長のようであることから、秋幸は神話的英雄と言ってよいだろう。秋幸とスサノオの近似性を見ていくと、〈秋幸サーガ〉の主要人物である秋幸・美恵・郁男の3人は三貴神と性質が似通っていることが確認できた。さらに、〈秋幸サーガ〉の舞台となる「路地」の家、つまり物語の基盤は、イザナギとイザナミの国生みを模したフサと勝一郎の性交によって創られたと見て取れることから、〈秋幸サーガ〉は神話を意識し、その構造に則って描かれていると考えた。

第4章 一1節『地の果て 至上の時』論—“父殺し”に向かう秋幸—

秋幸が“父殺し”を遂行する過程を確認した上で、秋幸がこれまで自身の内に潜んでいた邪悪な存在と出会い、自らを欺いた「路地」を浄化するまでを検討した。異母弟殺害によって自死した兄を越えた秋幸は、龍造と対決可能な位相へと昇り詰めた。秋幸が行う“父殺し”の方法は、龍造の拠り所を奪い、がらんとさせることで自殺へと追いやるものであった。“父殺し”を果たし、内に潜めた邪悪な存在と出会う危険に立ち向かえるまでに成長した秋幸は、「路地」を浄化するために火を放ったと考えた。

第4章 一1節補説『地の果て 至上の時』論補説—「水の信心」から読み解く“父殺し”の成功—

「水の信心」の読解からも龍造の自死による秋幸の“父殺し”の成功を見ることが出来る。「水の信心」では死んだ老婆を蘇らせようと、閉ざされた部屋に遺体を安置し行を続けた。龍造もこの老婆が安置された部屋のように、秋幸に殺された秀雄の蘇りの場となる部屋を設えた。この部屋は『枯木灘』の後日譚である『霸王の七日』（1977年）において遠つ祖・浜村孫一が黄泉国から現れる部屋として描かれていることから、龍造にとっての蘇りの空間と言える。しかし、「水の信心」の老婆が蘇らなかったように、龍造の部屋もまた蘇りの空間などではない。その部屋で秋幸を前にして龍造が縊死することは、龍造の永遠の死と、秋幸への敗北を意味すると考えた。

第4章 一2節『地の果て 至上の時』論一「路地」の真の姿と秋幸の業火一

「路地」の差別構造を明らかにし、秋幸が物語終盤において「路地跡」に放った火の意味を考える。龍造を死に追い込む過程で、秋幸は「路地」が差別されるだけではなく、「路地」の秩序に染まらぬ者を排除し差別していた事実を知る。秋幸にとってやさしく温もりに溢れていたその空間は、差別体質を孕んでいた。その差別構造は、秋幸とフサと龍造の間に築かれていた親和を壊し、龍造は悪だと秋幸に認識させ続けた。このような自らを欺き続けた邪悪な「路地」の姿を知った秋幸は、“父殺し”を果たし強大な悪の力を得た後、業火を放ち、悪しき「路地」を浄化したと考えた。

第5章 一1節『鳳仙花』論一父の欠落から見る天皇制批判一

中上はコトノハや書き言葉を天皇が統括していると考えていた。『鳳仙花』における男、その中でも父に関する描写を確認すると、父としての描写そのものが少なく、またその時の印象が薄い勝一郎、父であることを拒絶された龍造や自ら父であることを放棄した繁蔵の姿が描かれる。したがって、天皇によって作られたコトノハや文字を使い父の存在を欠落させ、また父に対する拒絶を描くことで、中上が天皇=父とした近代天皇制に対する反抗を本作の深層に潜ませたと考えた。

第5章 一2節『鳳仙花』論一史実の歪みから見える天皇制批判一

『鳳仙花』はこれまで歴史に即した作品と言われてきた。しかし、本作に描かれた史実を新宮市や和歌山県で刊行された新聞などから確認すると、大きな歴史も、また新宮市における史実も、天皇や天皇制に関わる重要な出来事があった年の史実が他の年にずらされ、また削除されていることが明らかとなった。これらの史実の歪みから、中上が天皇を無化していると言え、中上の天皇制に対する批判が込められた作品であると考えた。

秋幸の“父殺し”は龍造の拠り所を奪い、がらんどくとさせることで自死に至らせる手法を採っていた。この間接的に殺害する方法は、『鳳仙花』において黙説法を用いて天皇制を批判した手法と同様である。『地の果て 至上の時』以前に『鳳仙花』が執筆されたことから、この描写方法を見抜いた時、深層に込められたテーマと“父殺し”の成功を捉えうるのである。以上から、〈秋幸三部作〉という解釈の枠組みを解体し、〈秋幸サーガ〉という新たな解釈の枠組みを提示することによって、この物語群が秋幸の成長と“父殺し”の物語であると共に、天皇制に対する批判が込められた物語群であることを明らかにした。